

ジョイス・キャロル・オーツ作

「女神」について

田 中 育 造

ジョイス・キャロル・オーツ (Joyce Carol Oates, 1938-) は女性の心理と生理の深淵を垣間見るような思いをさせる小説を数多く書いている。『女神とその他の女たち』(*The Goddess and Other Women*) はそのような作品が25篇収められ、1974年にニューヨークのヴァンガード書店から出版された。オーツ 5 冊目の短篇集にあたる。小論ではその表題作である「女神」("The Goddess") をとりあげて、作品世界をさぐってみたい。なお、テキストにはヴァンガード書店の初版本を用い、引用文は括弧でページを示す。

1

全体は三つの部分からなり、終始、主人公である女性クローディア (Claudia) に焦点を当てて物語が展開する。

最初の部分は、クローディアが夫とともに3年ぶりに物語の舞台になる都市を訪れ、以前に泊ったホテルの、しかも同じ部屋に入ったところから、夕方の街に出て、通りの様子がすっかり安っぽく変わってしまったのに驚くまでが描かれている。

ここでは、クローディアの性格として、自分の意見を主張せず、夫のことばに常に同意し、しかも自分もそう考えていたのだと思ってしまうという面が先ず紹介される。

She always replied *Yes, very much.*

Strangely, it was always true. (403ページ)

always がくりかえされる。

一方、ホテルの部屋に入ってから夫が入浴をすませるまでの間ずっと窓から外を眺めているクロードディアの姿がある。

She remembered now the feeling of exultation, of unreasonable freedom, that she had always had when looking out the window of a hotel room. (404ページ)

窓から見えるのは向かいのビルで、壁面の大きなガラスにはクロードディアのホテルが映っている。それはクロードディアの目には

in a multilayered, jagged, unsequential way, as if someone had shaken both buildings, and outlines, the space between outlines, were not yet settled. Patterns sway-ed and did not come to rest. (404ページ)

と見える。

このように、外を見つめるクロードディア、そのことで覚える奇妙な解放感、向かいのビルに映る揺れる像と描写を重ねてくると、柔順な外面とはちがって、抑圧された心理、不安定な存在感を持つクロードディアの内面がわかってくる。更に“some of the upper stories thicker than the lower”と見える高層ビルは夕映えに美しいけれども“dizzying, disturbing”であり、“some [windows] glaring with light from the sunset, those in the middle paler, fainter, undefined.” (405ページ) と不安定のイメージは補強される。クロードディアの目に映る夫の姿、“a broad-chested man, somewhat overweight but curiously narrower in the waist, and especially in the hips, than he was in his torso” (410ページ) という逆三角形もここに含めていいだろう。

クロードディアのこうした状況にかかわりをもつのが、街の骨董屋のウィンドーに出ている小さな像である。

It turned slowly into the figure of a woman, but she was standing with her legs apart, pot-bellied, naked, her

breasts long and pointed, her savage fat-cheeked face fixed in a grin, her many arms outspread, and around her neck what looked like a necklace of skulls. (408ページ)

これを見て“Claudia felt her face flush, felt the surface of her skin react at once to this ugly thing—a rush of quick angry blood.” (408ページ) という反応を示す。摩擦音〔f〕を連続的に使用して表現するこの場面で、この像が何故クローディアの血を騒がせるのかという疑問を読者に与えて、最初の部分が終る。ここまでが導入部である。

2

第二の部分はホテルの部屋の中で展開する。

帰ってみると夫の書類かばんが失くなっている。夫はいきりたって、マネージャーにかけあうが、らちがあかず、警官を呼びにフロントに降りていってしまい、クローディアがひとり部屋に残される。夫はなかなかもどらない。

この部分は、時刻は真夜中、場所は殆どをホテルの一室に限定し、クローディアの内面に一層深く入ってゆく。展開部である。

先ず、クローディアが意識する時間の経過が、たびかさなる時刻の挿入であらわされる。“It was late now; it must have been after midnight” (414ページ), “Five to one” (415ページ), “now it was nearly one-thirty” (416ページ), “It was now nearly two thirty.” (420ページ), “since it was after three-thirty” (423ページ) と、ときには文中に、ときには一文として独立して出る。これは、事が解決して夫が帰ってくるのを待つクローディアの意識をあらわすものであるの言うまでもないが、一方では、不安な一夜が早く明けてほしいというクローディアの願望をあざわすものであると同時に、他方、時の進行を止めたいという、クローディアの意識の奥にある願望と対照させるためであるとも考えられる。それは、

In the mirror Claudia saw her own small, slender frame, the blond-tipped hair and the blond, smooth, perfect complexion, as innocent now as it had been twenty years before. (418ページ)

と描写される完璧な容姿を保つには時が止まってなくてはならないからである。同じホテルの同じ部屋に泊まり、同じレストランで食事するのも、ホテルの内装の変化に敏感に気づき、商店街のかわりように嫌悪を示すのも、骨董趣味も、みなそのことに通じる。ホテルの部屋にあるマッサージ用椅子についている時計に対して、“The whirring, clicking sound annoyed Claudia so she pulled out the plug” (415ページ) という箇所も同様とみていいだろう。自分を現実というものに痛めつけられないための防禦行為である。

そこで、現実をありのままに見ようとしないうクロードディアが描かれる。

She realized that the ugly overhead light was still on, so she switched it off. (412ページ)

この光はクロードディアにとって、“far too bright, its light raw, ugly, exaggerated” (409ページ) であった。更に二つの描写に気がつく。一つは、物語の冒頭で、夫が黒人のボーイにチップをやるときにぎこちない態度を見まいと背を向けているところであり、もう一つは、夫がかばんを探して部屋中を歩きまわっているときに、為すすべもなく座っているクロードディアが、子供の頃、目まいがしたときに先生に教えられたように、膝に頭をうずめてしまいたい気持ちにかられる場面である。このときは、夫にとがめられるのを恐れて実行しないが。

クロードディアにとって、現実は醜い。極めて直截的に ugly という語が頻出する。骨董屋で見た像の“this ugly thing” (408ページ) と“an ugly Oriental idol” (414ページ)、先に引用したホテルの部屋の“its light raw, ugly,”と“the ugly overhead light”, テレビの画面に写る女の“the women with ugly dark lipstick” (416ページ), そして“in this ugly hotel room” (420ページ)。特に、真夜中に一人おかれたホテルの一室で、クロード

ィアの目にうつる調度品について、“pretentious” “fake-gold” “helter-skelter” “iridescent”と一文の中に連続し、“the foam-rubber pillows” “the lipstick stains on the bedspread” “the television cabinet and dresser that didn’t fit in” “pieces out of a department store basement”と、汚れ、まがい物、安物の表現が並ぶ（420ページ）。クローディアのinnocence意識をきわだたせる。

こうした汚濁の世界から逃れるかのように、クローディアは廊下へさまよい出る。動機は説明されない。非常口の重い扉を開けて非常階段へ出る。これは、己れの殻の中の安全な場所から外の世界へ一歩ふみ出すという象徴的な行為である。安っぽくて汚れていても、鍵をかけ、暗くしてしまえば、ホテルの部屋はクローディアにとって一応安全な場合はずだ。直前の一節には、自分の家の寝室に一人いて、うつろな部屋にじっと瞳をこらして、何かが起るのを待っているのだと、自分を信じこませようとしている描写がある。そこから出るというのは、うとましい汚垢の中から逃れようとするためであると同時に、自分で自分をとじこめてしまっている檻から衝動的に出ようとしたものとも受取れる。

階段の踊り場には食べかすが山と積みあげてある。これは、人間が生きた痕跡である。クローディアが見ようとしなかったまごうかたなき現実である。クローディアはそれを階段へ、できうるならば、だれかの顔にぶちまけてやろうかと思う。しかし、何もしない。一階おりると、今度は口紅で壁紙を汚してやりたい衝動を感じるが、また躊躇してしまう。エレベーターの前に出ると、大きな陶製の灰入れが目につく。倒して、あたり一面吸殻だらけにしてやりたいと思うのだが、そいつはびくともしない。

こうした一連の行為、というより行為への衝動は、クローディアの心の奥にあって、普段はおさえられていた、生に根ざすエネルギーの本体とでもいふべきものから発したものと解釈していいだろう。無垢であることを後生大事にまもってきたクローディアにとって、このエネルギーの噴出は危険なものである。行為によって現実に直面せざるをえなくなるからである。しかし、心の片隅ではそれを欲している。その拮抗が心を不安定にする。この小説は不安定のイメージから始まっていた。それをよくあらわす場面がある。

She looked into the bathroom but the whiteness of the porcelain and the hair-thin cracks in it made her dizzy.

(412ページ)

白さはクロードディアの無垢をあらわし、細い割れ目はクロードディアの心の、あるいは、完璧な存在の亀裂である。ひび割れを見ての眩暈はそうした存在をおびやかすものへの恐れと、破壊を求める心の奥の願望との、あい反する両面の表現とみることができる。

導入部の終り近くにあった女の像は、まさに、クロードディアが封じこめようとしていた生の、本能の、エネルギーをあらわすものであった。脚をひろげ、腹をつきだし、裸で、乳房を大きくあらわに見せた姿は、女のむきだしの性であり、多くの腕をのばしているのは、色いろなもの、特に男をつかまえようとしている形象であり、首のまわりにぶらさげている頭骸骨は、その手でとらえ、むさぼり喰った男たちの残骸であろう。

この像があらわす意味を読みとり、自らの内にそのような衝動があるのに気づいたがゆえに、クロードディアの血が騒ぐのである。夫のことは一々同意する柔順なうわべの陰に、男をくろう欲望がうずいている。その衝動が、ほんのちょっとしたきっかけで、つまり、真夜中の閉ざされた異常な状況のもとで、形をかえてふと姿をあらわし、クロードディアをあのような行為に走らせようとする。それは、睡眠によって心の制御が緩むとともに、意識の底におさえられていた諸々の願望が夢となって浮きあがってくるのに似ている。己れの無垢に執着するあまり、現実と直面するのを忌避するクロードディアであるから、先に述べた時の経過を幾度か示していた箇所は、このような夜が早く明けるのを願うクロードディアの意識と重ねあわせて見ることもできる。

導入部で見た自己を主張しないクロードディアの性格は、展開部でも再びあらわされる。通りの雰囲気が下品になってしまったように、レストランの料理も、ホテルに帰ってもどしてしまうほどにまずいものであったのだが、夫がうまかったと言うと、“She had agreed. Strangely, she had enjoyed the dinner well enough,”と感じてしまう。しかし、ここでは、すぐ続いて“and only at the end did something puzzle her: the

memory of the boy shouting in the street, something about \$ 15,000, an ugly Oriental idol, the stretch of pizza and greasy French fries and uncollected garbage out along the Avenue.” (413—4ページ) というクロードの心象風景が加わる。世俗のしきたりからとびだしたヒッピー風の青年の姿は、クロードの柔順な表面のかげにひそむ日常性からの脱出の願望と二重写しになるものであろうし、回収されていない道端のごみは、後にホテルの裏階段にある食べ終わった食器の山につながっていく。醜怪な東洋風の偶像是既にふれた。

結局、クロードは何もしない、何もできないでこの部分は終る。

3

最後の部分は全23ページ中のわずか3ページからなる短いもので、終結部に当たる。

刑事が夫とともに来て、通り一遍の捜査をしていったあと、疲れきった夫はすぐに眠ってしまうが、クロードは寝床を抜けだし、窓辺に立って思う。私は清浄無垢である。いささかの瑕瑾もない。夫ですら真の私を知っていない。ホテルのどこかをいためたとしても、誰も私がしたとは思まい。私の存在は“really invisible”なのだ——クロードの目には、今しもさしてくる朝の光が、昨日の夕陽よりも美しく見えるところで物語りは終る。

不安な一夜を明かしたクロードは、からくも無垢なる自己を守りえた。その意味では、はやりの言葉でいうと、アイデンティティーを失うことはなかった。しかし、からだの奥底からほとばしり出ようとするもの、これを自己の本質とっていいなら、これこそ真の意味のアイデンティティーなのであろうが、それを遮蔽することによってなのであった。

何者の侵入も許されない城壁を己れのまわりにめぐらし、その中に、汚れなく、美しくおさまっているクロードは、まさに題名が示す女神である。しかしその女神の体内の奥深いところには、例の東洋風の像の如き不気味な容姿をしたもう一つの女神がひそんでいて、人前に姿をあらわすことがない。それが“really invisible”の意味であろう。そうい

えば、女神の像がクローディアの目に入るときの場面で、“It turned slowly into the figure of a woman” (407ページ) となっていて、外見からは像がにわかにはわかりにくいもののように表現されていた。

クローディアは窓から明け方の遙か下の通りを見おろしている。

Down on the street, a police paddy wagon …a group of three, four figures herded into it…men, were they, or men and women both? Hippies? Who were they? It was too far away for her to make them out; she could see only the gross movements, the event itself. She wondered at their lives—jumbled together in the back of a paddy wagon, now being driven off together. The thought of them excited her. (424ページ)

クローディアの目には路上の人たちの姿は見えても、個々の人間は見わけることにはできない。それは丁度、ほかの人には真のクローディアが見えないのと同じである。とらわれの身であるところも共通する。クローディアはガラス窓の中に、美しい容貌の中に、夫や世間のしがらみの中に——つまり自己の外面に、とらわれている。護送車で連れ去られる人たちの身の上を思っているうちに感情がたかまってくるというのは、下の情景に己れの姿を見ていることをあらわしている。

夜が明けることによって事件の解決や、事態の好転をあらわす常套的手法を、ここでは、朝はクローディアの内なる姿を浮きあがらせようとする夜を消してしまうものとして用いている。暮れなずむビル街の風景を眺めていた冒頭の場所と全く同じところにクローディアを立たせて、

Light came now from the other direction, slowly transforming the building. It seemed to her even more beautiful than the sunset of the night before. (424ページ)

と描写するこの物語の最後の一節は、クローディアのもつ二面性のしめ

くくりとなる。光がさす方向が変われば建物の外見も違って見える。別の方から光がクローディアの二面の中の一面 (the other direction) を照らすと、その姿(the building)は形を変えてみせる。朝日の“even more beautiful”が外面の美しさを保つのがクローディアにとって自己統一の要になっているのだということを表現するわけである。このようなクローディアの姿も、女なるものの一人なのであり、女のもつ多様な面の一つなのであろう。

不気味な非日常の世界を陰に秘めたなにげない日常の世界とそこに生きる女たちの生態を、緻密な構成で描いてみせるのは、オーツの得意とするところである。この短篇集には女という名のもとにひとからげにになってしまうことのできない、様ざま女たちの、色いろな生きるさまがくりひろげられていて、まさに題辞にある John Donne の“Things naturall to the Species are not always so for the individuall”なる一節が最もよくこの作品世界をあらわしていると思われるのである。

付 記

Linda Welshimer Wagner 編になる *Critical Essays on Joyce Carol Oates* (Boston: G. K. Hall, 1979) の中に Joanne V. Creighton の“Unliberated Women in Joyce Carol Oates's Fiction”という論文が収録されていて、その中で、例の女神の像について、これがヒンドウーの女神カーリ (Kali) であることを、オーツに手紙で確認している。ここでヒンドウーとかカーリとかいう固有名詞をもちだす必要はなにもなく、要は、クレイトンも述べているように、この像が「他の生きものをくらって生きる要素を奥に秘め、真の姿はあらわすことのない」「おんなの性^{さが}のどすぐらいの半面」を示すものでありさえすればいいのではあるが、たしかにカーリにはオーツの意図した要素が多分に含まれている。いま、二つの百科事典の記述によってその点を見ると、*Encyclopedia Americana* (Vol. 16, Donbury, Conn: Americana Corporation, 1979) では、

In art Kali is represented not only with a black skin but often with a hideous facc and emaciated body entwined

by cobras and decorated with necklace of skulls and garlands of human heads, indicative of her fondness for blood sacrifice. Sometimes, especially in more or less modern icons, she is shown as a domineeringly beautiful black woman, adorned as usual with snakes and skulls, who treads on the body of a white-skinned male figure, not easily identifiable with the demon general. He seems, rather to be her prostrated husband Siva (shiva), whom she spurns for having taken to opium, leaving the sole governance and protection of the universe to her.

とあって、カーリはクロードディアの丁度陰の姿になる。“black skin”や“black woman”とは、白い肌の陰画、またはクロードディアの暗黒の面と読みかえてみることもできる。

The Columbia Encyclopedia (Third Edition, N. Y.: Columbia University Press, 1963)では、

Known also as Durga [the Inaccessible] and as Chandi [the Fierce], Kali is associated with death, destruction, and epidemics. As Parvati she is the consort of Siva. Though often represented as a terrifying monster, garlanded with skulls and bearing a bloody sword in one of her many arms, she is worshiped lovingly by many as Mata, the Devine Mother. … (略) … Kali was patroness of the Thugs.

とあり、“the Inaccessible”とはまさにクロードディアの人には見せない心の奥であり、恐ろしい形相をしていても、聖なる母性とあがめられるというのも、クロードディアが世間では美しい、しとやかな夫人として通っているところと重ねあわせてみられなくもない。

(1981年11月)

An Interpretation of Joyce Carol Oates's "The Goddess"

Ikuzo TANAKA

The essay intends to analyze the construction and characterization of Joyce Carol Oates's "The Goddess", one of the 25 stories collected and published in 1974, and find what the goddess signifies. The interpretation will reveal the dark, invisible side of the beautiful and innocent heroine, Claudia.